

## ヤコブ書2章1-13節「心の中の差別」

### 1A えこひいきの問題 1-7

1B 栄光の主 1

2B 見た目の判断 2-4

3B 霊的な真実 5-7

### 2A 律法違反 8-13

1B 王の律法 8-9

2B 自由の律法 10-13

## 本文

ヤコブの手紙2章を読みます。私たちは前回、1章22節から「みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」という言葉を読みました。そして、具体的に宗教について、本物とそうではないものの区別を行ないました。26-27節をもう一度読みます。「自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。」御言葉を聞いて、御言葉について多くを語ることもできても、その御言葉を実践することがなければ、それは空しいというものです。具体的に、孤児や寡たちが困っている時に世話をするとところに、本物の宗教を行っているかどうか試される、ということでありました。

旧約聖書を読むと、一貫して孤児や寡、食べるのに困っている人々、在留異国人に対する配慮で満ちています。モーセの律法がそれを命じていました。そして、新約時代の教会においてもその倫理は受け継がれています。けれども、私たちの社会が当時と比べると大きく変わっているので、当時の背景を知ることとはとても大事です。今と昔の違いは、福祉制度があるかないかであります。神の憐れみと賜物によって、聖書で命じられている弱者救済や、人権保護などは今日の先進国ではかなり守られています。ですから、私たちこの日本において、教会がこぞって孤児院に行くであるとか、夫に先に発たれてしまった未亡人の方々のところに援助するために群がるのが、ここでの適用ではありません。むしろ、この富んだ社会の中で出てきた歪みの中に生きている人々、また死角となって富の中の貧しさを味わっている人々など、多元化されている社会でいかに福音を伝えるべきか、このことに注目していく必要があります。

### 1A えこひいきの問題 1-7

そしてヤコブは、とても単純、卑近な例として私たちに、御言葉を実践するよう勧めます。それはまさに、「教会の中」で起こっていることです。私たちは、孤児や寡というと「そうだ、外に出ていって慈善活動しなければ。」と飛躍します。けれども、ヤコブは目の前にその弱き者がいるのだから、

それを実践しなさいと戒めているわけです。私たちは教会の中で熱心に奉仕をしているのですが、その熱心さは素晴らしいことです。けれども、その熱心さが自分を霊的にしていると欺いてしまい、実はとんでもない罪を犯しているのだということを感じさせる問いかけと指導を、ヤコブは行っています。

## 1B 栄光の主 1

1 私の兄弟たち。あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから、人をえこひいきしてはいけません。

ヤコブは再び、「私の兄弟たち」という愛情を込めた問いかけから始めています。そして、命じているのは「人をえこひいきしてはいけません」ということです。そのえこひいきしてはいけないという戒めの根拠が、「私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っている」ということであります。ヤコブは主イエス・キリストを敢えて「栄光の主」と呼んでいるところが大事です。なぜならば、これから、金の指輪や、りっぱな服装を着た人々を丁重に教会にお迎えする場面が出てくるからです。栄光のキリストがおられる教会で、キリスト以外の栄光に引き寄せられた罪について話すからです。

イザヤ書 2 章において、ユダの国が金銀で満ちて、財宝が与えられ、また軍馬や戦車も限りない状態を神が嘆いている箇所があります。なぜならば、そのことによって主に栄光が与えられるのではなく、そうしたきらびやかなものに拠り頼む高慢があったのです。それで、主は大患難において、それら拠り頼むものを取り除き、その威光の姿を見て恐れまどうという話が出てきます。したがって、イエス・キリストの栄光が輝かなければいけないはずの教会で、金の指輪やりっぱな服装をしている人に気が逸れることはあってはならないのです。

イエス様が十字架に付けられる前に、父なる神とイエス様との間で会話がありました。「父よ。御名の栄光を現わしてください。」そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現わしたし、またもう一度栄光を現わそう。」(ヨハネ 12:28)つまり、イエス様は十字架において神の栄光を表し、そして昇天して神の右の座においても栄光を表されます。私たちは、キリストの十字架において、力を持った人も、力を持たない人も、知恵のない人も、知恵のある人も、全ての人が平等に、自分が神に罪を犯し、神の裁きを受けなければいけないが、キリストが罪の罰を受けてくださった神の恵みの前でひれ伏すのです。キリストの十字架に、ただ神の栄光が輝いており、その贖いに基づいて、キリストが再び戻ってこられ、栄光と力ある姿で戻ってこられるのです。私たちが、この恵みに留まっていない時に、次のことが起こります。

## 2B 見た目の判断 2-4

2 あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、立派な服装をした人がはいつて来、またみすぼらしい服装をした貧しい人もはいつて来たとします。3 あなたがたが、りっぱな服装をした人に目を留め

で、「あなたは、こちらの良い席におすわりなさい。」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこで立っていないさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい。」と言うとすれば、4 あなたがたは、自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったのではありませんか。

「会堂」となっていますが、これはユダヤ人信者たちの集まる教会だったからです。初代教会は、ユダヤ教の習慣のいろいろな側面を踏襲していた可能性があります。そして、状況は二人の新来者、あるいは新しく信じた人であったと思われます。案内人がいます。初めは、「金の指輪をはめ、立派な服装をした人」とあります。この金の指輪は、私たちがはめているようなものではなく、指に何本も輪がからんでおり、一本だけでなく数本の指にかけられているものです。そして、立派な服装とはローマ式の真っ白な上から下までの布でできているものだったでしょう。

そして、「みすぼらしい服装をした貧しい人」が入ってきました。もう一度思い出していただきたいのですが、このような経済的格差は、今の日本よりはるかに大きいものでした。至る所に貧しい人たちがおり、そして金持ちもおり混在していましたが、それぞれが過ごしやすい環境というものを保持しながら生きていたのです。それぞれの中に近くにいながら分離している空間を作っていました。だから、そのまま案内人が、世の中のことを教会の中でも行なった、ということができます。

世の中では当たり前であっても、それがキリスト者としてはあってはならないことであることを、ヤコブが叱責しています。「自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になった」と言っています。初めの、「自分たちの間で差別を設けている」という「差別」は二つの意味があります。一つは、そのまま「区別をする」あるいは「差別をする」ということです。目で見えるものによって、分類するということです。私たちは絶えず、目に見えるものにしたがって判断をしていながら生きています。しかし、私たちキリスト者は絶えず、目に見えない真実に従って判断しなければいけません。目に見えない真実とは、信者であれば「キリストがこの人と共におられる」という真実です。未信者であれば、「キリストがこの人のために死なれた」という真実です。大事なものはキリストご自身であり、キリストのゆえ尊厳をもって、尊敬をもって接するのです。信者についてパウロはこう言いました。「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つのからだです。(ガラテヤ 4:28)」

もう一つの「差別」と訳されているギリシヤ語の意味は、1章6節で「少しも疑わずに」とあるように、疑うと訳されているものです。つまり、二心になっていることを示しています。この世と、神の御国の現れである教会は相対するものです。その価値観はぶつかり合っています。そこに、ゆえに一方では神の国を信じてその中に生きているのに、具体的な教会での案内となると世の中のしきたりに従ってしまう、という二心の話をしています。

そして、「悪い考え方で人をさばく者」とヤコブは言っています。ここの「さばく者」というのが、モーセ五書にある「さばきつかさ」に対する戒めの中に出てきます。例えば、出エジプト記 23章 2-3節、

「悪を行なう権力者の側に立つてはならない。訴訟にあたっては、権力者にかたよって、不当な証言をしてはならない。また、その訴訟において、貧しい人を特に重んじてはいけない。」とあります。力を持っているかどうか、身分が高いか低いか、自分に良くしてくれた人か無関係の人か、さばきをする時にそういったもので裁いてはいけません。けれども、教会の案内において富んだ人に良い席を与えて、そうでない人を床に座らせるというのは、そのような偏った裁きを行っている、と言っているのです。

### 3B 霊的な真実 5-7

何がそんなに悪いことか？と思われるかもしれませんが。世の中では、自分の気に入った人々のところに近づきます。気に入らない人とは距離を話して付き合います。お金持ちと、貧しい人は混じることはないのだから、そのように案内して良いではないかというのは正しいように聞こえます。しかし、教会では全く成り立たない論理です。

5 よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。

イエスが神のものになっている者たちを選ばれ、呼び出されて、そして神の国を相続する者たちとしてくださるのですが、その時の召しは、「貧しい者」であることを思い出してください。山上の垂訓では、「心の貧しい者は幸いです。」とあります。ルカによる福音書6章の、平地における垂訓では「貧しい者は幸いです。」ともっと単純にしています。メシヤについての預言をイザヤが行った時は、「主が、貧しい人々に福音を伝える(ルカ 4:18)」と言いました。神の御国は貧しい者を呼び出すところから始まるのです。

聖書が語っている貧しさは、経済的困窮に留まりません。社会的疎外、精神的貧しさ、そしてもちろん霊的貧しさ、罪ゆえに引き起こされている貧しさです。ですから、福音書の中を見れば、イエスご自身が、何でもないナザレの町で育ちました。貧しい家庭で生きておられました。社会的に阻害されていた羊飼いに、イエスの誕生を天使たちは告げました。そして、サマリヤの女もいます。彼女は他の女たちから嫌がられていたことでしょう、たった一人で水を汲みに来ました。金持ちのザアカイもいます。彼は孤独な取税人でした。金は持っていました、彼も貧しい者でした。そして遊女であった女、姦淫の現場で捕えられた女もいます。このような包括的な困窮に対して、このような者たちを「幸い」と言われて、御国に招き入れられたのです。

なぜか？先ほど話したように、生活の自慢、高慢が取り除かれているからです。日々の生活に悪い意味で満足している人々は、自分にこそ命がある、生きる源泉があると思っています。そうしたものが取り剥がされるので、信仰において富むことができます。その人が神の御国を受け継ぐとイエス様が言われた通りであります。ですから、教会は何ですか？自分はぶざまな者であったが、神の恵みによって敢えてこの交わりと家族の中に招き入れられた者たちとして、互いに驚き、

互いに喜ぶ間柄なのです。「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。(1コリント 1:26-28)」

私たちは、どうしても目で見えることにしたがって裁きます。預言者サムエルの時代に、見た目には美しいサウルは神に退かれ、ダビデが選ばれました。サムエルは神から、「人はうわべを見るが、主は心を見る。(1サムエル 16:7)」と言われました。サムエルでさえ、見た目が気になってしまっていたのです。イエス様はユダヤ人宗教指導者に向かって、「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。(ヨハネ 7:24)」と言われました。イエス様ご自身が、彼らから見た目で裁かれていたのです。ナザレという何でも無い町で育ちました。イザヤ 53 章によると、イエス様は人目に美しい方ではありませんでした。周りにいるのは、漁師であったりして無学の者たちでありました。イエス様ご自身、学問をどこで得たのかわからないとユダヤ人たちは話していました。そしてイエス様は取税人や罪人と食事をされました。そしてうわべで裁いていたのです。

しかし、貧しい者に御国が臨むという世界をイエス様はずっと見ておられました。貧しいやもめが、レプタ銅貨二枚を入れた時に、弟子たちに向かって言われました。「この貧しいやもめは、どの人よりもたくさん投げ入れました。(ルカ 21:3)」このような霊の目、見た目に左右されない目を神が与えてくださいますように。



<http://www.amusingplanet.com/2013/09/the-cave-church-of-zabbaleen-in-cairo.html>

貧しい者たちに与えられた御国を、信仰を豊かにして見ることができますように。神の御国は、問題だらけのところ、大なる喜びと平安と愛で湧きあふれています。私は、宣教地で人々が信号を無視して、車優先で、そのめちゃくちゃな姿を見るのが好きです。社会問題は山積しています。ところが、なぜか心がわくわくするのです。なぜなら、その社会的貧しさのところ、安定している所では決して味わえない御国の現実を見るからです。例えば、エジプトには大きなスラム街があります。カイロの町で出てきたゴミがその町に集められます。「ごみの町」と呼ばれていますが、そこに洞窟を使った巨大な教会があります。中東で最大の教会で二万人を収容できます。証しは、頭が潰されて変形した子のために祈ったら癒しが起こったなど、初代教会そのものであります。

私たちは貧しい人々を助けてあげようなど、傲慢な態度を捨てるべきです。貧しい人々のところに行って天国を見させていただく、その人々と共にいることで御国を頼ませていただくという特権にあずかることができるのです。日本でも同じです。日本はいろいろなことを、体裁よく見せるタブーの文化が発達しています。経済的な貧しさは社会保障によって守られますが、問題があってもあたかも問題がないかのように生きないといけない心理的圧力があります。そのはざままで苦しみに悶える人々があまりにも多いのです。その死角の中に生きている人々は貧しい人々です。主が、この教会にも貧しい人々をもっと送ってくださるよう祈ります。

2:6 それなのに、あなたがたは貧しい人を軽蔑したのです。あなたがたをしいたげるのは富んだ人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。2:7 あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名をけがすのも彼らではありませんか。

ユダヤ人信者は迫害されていたことを思い出してください。その時に迫害する人々は、決まって富んだ人々ではないか？とここでヤコブは思い起こさせています。同じユダヤ人が貧しいユダヤ人を虐げていたという現実が、信仰以前にありました。そして信仰を抱くことによって、迫害を力で行なうのは富んだ者たちでした。神の御国が拡がることによって、自分たちの立ち位置が脅かされるということがあるでしょう。イエス様を殺す計画をサンヘドリンで決めた時に、カヤパは自分たちがローマから土地が奪われるということを恐れました(ヨハネ 11:48)。祭司職の者たちは、上町というところで非常に裕福な生活をしていました。同じように、裕福なユダヤ人不信者が彼らを迫害していました。

自分が信仰を持っていて、それで迫害する人たちのことを考えてください。力関係においては、自分よりも力のある人たちです。自分には力がなくとも、集まって人をシカトするであるとか、陰湿なものもありますが、それも力として数えましょう。福音や神の真理に従おうとする人々は、へりくだった者、心の貧しさを持っている者たちです。

## 2A 律法違反 8-13

### 1B 王の律法 8-9

8 もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行ないはりっぱです。9 しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。

「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」というのは、もちろんイエス様が最も大切な掟であるとして引用された、レビ記 19 章 18 節の言葉です。ヤコブがこの手紙で頻繁に話している「律法」とは、いわゆるモーセの律法というよりも、イエス・キリストによってまとめられた新たな命令と言ったほうがいいです。キリストがあらゆる律法をまとめて、まず神を愛しなさい、そして、そこには自分自身のように隣人を愛しなさいという戒めが同時に付いてきます。

大事なのは、「最高の律法」と訳されているところです。これは、「王の律法」と訳すことのできるものです。栄光の主イエス・キリストの律法でありますから、王なるキリストの律法ということです。つまり、これは王権をともなった、絶対権威のある、畏れ多い律法であるということです。この律法に違反する者なら、それ相当の罰が伴うというものであります。私たちは、キリストの御国にいます。そして、王なるキリストが与えられている掟の中に生きており、それがこの隣人を愛するという掟なのです。

そして、えこひいきは隣人を愛することに違反するものです。申命記 10 章 17-18 節に、神はご自身をこう宣言しておられます。「あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、わいろを取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行ない、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。」

### 2B 自由の律法 10-13

10 律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。11 なぜなら、「姦淫してはならない。」と言われた方は、「殺してはならない。」とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。

これは、律法によって義と認められようとする人と、キリストの律法に生きようとする人の違いを示しています。律法によって義と認められようとする人は、自分のしている義を積み上げようとします。姦淫を犯さなかった、嘘をつかなかった、など、自分の行なった義を積み上げるのです。しかし、キリストの義に生きようとする人はイエス様の次の言葉に耳を傾けます。「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。まことに、あなたがたに告げます。天地が減びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれ

ます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。(マタイ 5:17-19)」

ある人は、律法を「縫い目なしの服」に例えました。一つの戒めともう一つの戒めを、部分に分けることはできず、全ての戒めを破ったのと同じようにみなされるのです。つまり、律法はその規則を一つ一つ守ることよりも、律法を与えられた神と共にいることに力点が置かれています。

自分は律法によって義と認められることはないのだということを知る人が、キリストの義を知ることができます。したがって、自分が何かができていることを数えるのではなく、自分がいつも、十字架の前に行っているかどうかということに気をしています。自分はキリストと共に十字架に付けられています。自分は、その罪がキリストと共に十字架につけられ、死にました。そして、この死をもってすべての律法が成就しました。律法の要求する死がキリストの死によって成就したからです。ですから、えこひいきをしていることについても、それが罪であることを示されたら、主の前で心砕かれ、心の貧しい者となり、神の憐れみを請い、主によって直していただくことを願います。

2:12 自由の律法によってさばかれる者らしく語り、またそのように行ないなさい。

自由の律法とは、すべての律法を成就されたキリストの義によって生きること。そして、キリストの命じられた掟の中に生きることです。愛の戒めがそれですが、律法による神との関係ではなく、神に愛されて、神を愛するその関係にいるときに、私たちに自由が与えられています。そして、宗教の熱心さによって自分をごまかす生活ではなく、このような愛の律法によって自分に欠けているところを悔い改め、またその悔い改めの実を結ばせる生活を歩みます。

2:13 あわれみを示したことの無い者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。

貧しい人を顧みることは、憐れみを示すことです。そして憐れみを示すことは、自らも神の憐れみを受けることとなります。「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けます。(マタイ 5:7)」私たちは、罪に定められる者たちでありました。けれども神の憐れみは、その罪定め打ち勝ちました。同じようにして私たちも、憐れみによって勝利するのです。つまり、自分が憐れみの業を行なうことによって、神の憐れみの中に生き、それによって自分が罪定めから解放された生活を歩むようにできる、ということです。罪を赦さない人の譬えを思い出してください。大量の借金を帳消しにしてもらったのに、友人の少額の借金を赦せませんでした。そのために、彼はその大量の借金を返済するまで牢屋に入れられたのです。私たちの唯一の道は、このように憐れみの中に生きること、人に積極的に示す善の行ないの中に生きることなのです。